

# モンゴルにおける日本語教育 — 高等教育機関における漢字教育に着目して —

ウラムバヤル ツェツェグドラム

## 要 旨

本稿では、モンゴルにおける日本語教育を概観した上で、日本語学習者数が 40.61% を占める高等教育機関における日本語教育に着目し、特に漢字教育の現状を、漢字教育の実態と学習者の漢字能力の 2 側面から検討する。まず、漢字教育の実態については、漢字指導に携わっているモンゴル人日本語教師にインタビュー調査した結果、モンゴルの高等教育機関では、漢字語彙の形態、意味、読みが丁寧に指導されていることが明らかになった。次に学習者の漢字能力に関しては、加納(2004)の漢字語彙処理能力テストで調査した結果、モンゴル人日本語学習者が漢字の同音字の識別、文脈(文法的共起性や意味的な連語知識)による漢字語の選択の能力が低いことが分かった。従来の漢字指導は字形識別、意味処理、書き処理などにある程度の効果をあげているが、今後は、文脈の中で既存の知識を使って漢字を推測するようなストラテジー教育も重要であると思われる。

【キーワード】モンゴルの高等教育機関、モンゴルの漢字教育、モンゴル人日本語学習者、漢字語彙処理能力

## 1. はじめに

本稿では、まず、モンゴル国(以下モンゴルとする)の地理、人口、言語、教育制度について紹介する。次にモンゴルにおける日本語教育事情について日本語教育の沿革、日本語教育の現状、日本語教育分野における課題について述べる。さらに、機関種別に見て最も日本語学習者数が多い高等教育機関における日本語教育の問題点について概観する。次に特にモンゴル人日本語学習者にとって難しいとされている漢字教育について、モンゴルの代表的な 3 つの国立大学(4 学部・学科)で実際に行われている漢字指導の現状、日本語学習者の漢字能力の実態を調査した結果を報告する。



図 1 モンゴル国の位置

(<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/>  
2010 年 11 月 11 日アクセス)

キリスト教も入ってきている。

## 2.2 モンゴルの言語

モンゴル国憲法第 1 章 8 条には、「モンゴル語を国家の公用語とする」と定められている。現在、モンゴル語で使われている表記は、キリル文字である。キリル文字を取り入れる以前の元々のモンゴル語の文字は、1206 年にチンギス・ハーンが諸部族を統一し、初めてモンゴル帝国を建てた時代に、ウイグル文字を借用して作ったウイグル式モンゴル文字である。図 2(次頁 左側)のようにモンゴル文字は上から下へ向かって縦に書き、行は左から右へ追っていく。

しかし、モンゴル文字による表記は、発音をそ

## 2. モンゴルの概況

### 2.1 モンゴルの地理、人口

モンゴルは、東アジアに位置し、ロシア、中国と国境を接した内陸の国である(図 1)。面積は約 156 万 4,100 平方キロメートルで、日本の約 4 倍の広さである。

人口は、277 万 8,281 人(モンゴル教育文化科学省実施調査 2010 年末現在)で、民族は、人口の 95% がモンゴル人、5% がカザフ人である。

宗教は、チベット仏教を信じる人が多いが、カザフ人が住む地域ではイスラム教が中心である。最近、



図2 左：モンゴル文字、右：キリル文字の「モンゴル」(後藤田 2002)

のまま表記するものではなく、発音されない文字を多く含む。そのほかにも、文語と口語の隔たりが大きいなどの理由から 1941 年 3 月にロシア語に用いられているキリル文字の採用に踏み切った(図 2 の右側)。現在使用されている文字体系は、キリル文字にない 2 つの母音字を加えた 35 字からなる(後藤田 2002)。

ただし、モンゴル文字については、1990 年代のモンゴル文字復活運動がきっかけとなり、現在、再び中学校から 3 年間必修教科として学習されている。

### 2.3 モンゴルの教育制度

モンゴルの教育制度は、基本的には 12 年制の小・中・高一貫教育である。小学校が 6 年間、中学校が 4 年間、高校が 2 年間となっており、小・中学校の 10 年間は義務教育となっている。2007 年までは 5-4-2 制の 11 年制だったが、学歴が 11 年間のため国内の高校を卒業してすぐに海外の大学に留学できないことから初等・中等教育機関の制度を国際的な制度に近付けるために 2008 年より 6-4-2 の 12 年制に移行した。高等教育では、大学の学部が 4 年間、大学院修士課程が 1~2 年間、博士課程が 3 年間となっている。

モンゴルの初等・中等教育機関においては、2007 年度より、小学 4 年生から英語が第 1 必修外国語として教えられている。また、7~9 年生(日本の中学 1~3 年生に相当)の 3 年間はロシア語が第 2 必修外国語として教えられている。学校によっては英語とロシア語以外に選択もしくは選択必修の外国語として、日本語、中国語、韓国語、ロシア語、フランス語、ドイツ語などが教えられている。

## 3. 日本語教育事情

### 3.1 モンゴルの日本語教育の沿革

モンゴルの日本語教育の歴史は社会主義時代(1975-1989 年)、民主化以降(1989 年以降)の 2 つに

わけることができる。

モンゴルと日本との国交は 1972 年に樹立された。その 3 年後の 1975 年にモンゴル国立大学文学部モンゴル語学文学学科に副専攻としての日本語コースが開設される。そして、1976 年に日本への語学留学生の派遣が始められた。当時は、日本語学習者が非常に少なく、日本に対する関心がそれほど高くはなかった。

1989 年に民主化され、それ以降モンゴルと日本両国の関係が急速に発展したことをきっかけに日本語教育機関、日本語学習者の数が増加した。また、前述のように現在では、高等教育機関だけではなく、初等・中等教育機関の一部においても第二外国語として日本語の教育が行われている。

1993 年に「モンゴル日本語教師会」が設立され、モンゴルにおける日本語教育および日本語・日本語教授法の研究を支援している。2007 年からはモンゴル日本語教師会の下に「モンゴル日本語教育研究会」が設立され、モンゴル・日本人材開発センターを中心に月 1 回の例会を行っている。また、ウランバートル市教育局でも初等・中等教育機関の日本語教師を対象とした勉強会を実施するなど教師間ネットワークが形成されつつある

その他に 2001 年にモンゴル国内で初めて日本語能力試験を実施、2002 年には、日本政府の援助で、ビジネス教育・日本語教育・文化交流を基本としたモンゴル日本人材開発センターが開設され、文化交流、日本語教育、日本語教員の養成に携わっている。また、2008 年に実用日本語検定(J.TEST)の実施が始められた。

新しい動きとして、2008 年 9 月からは国立看護学校および IT 技術者養成コースにて日本語教育が開始された。また、日本の高校のカリキュラムや制服着用の規則など日本式の教育制度を取り入れた「新モンゴル高校」、日本語によるイメージ教育を目指す「ナラン学校」も設立された。

### 3.2 日本語教育機関数・教師数・学習者数

ここでは、モンゴルにおける日本語教育機関、日本語教師、日本語学習者の数の変化について紹介する。表 1 は、1998 年から 2009 年までの国際交流基金によるモンゴルにおける日本語教育機関調査結果をまとめたものである。

1998 年から 2006 年かけて日本語教育機関数は、24 校から 90 校へ、日本語教師数は、76 人から 354

表1 日本語教育機関の調査結果

全体	1998年	2003年	2006年	2009年
機関数(校)	24	67	90	66
教師数(人)	76	199	354	238
学習者数(人)	2873	9080	12620	11604

人へ、日本語学習者数は、2,873人から12,620人へと急激に増加した。しかし、2009年には、2006年の調査結果と比べて、日本語教育機関数は90校から66校に、日本語教師数は354人から238人に、日本語学習者数は12,620人から11,604人と減少し、伸び悩んでいる。

この結果を初等・中等教育機関、高等教育機関、学校教育以外の3種類の機関別にみると図2のようになる。図2から明らかなように初等・中等教育機関数が増加しているのに対し、高等教育機関数が2006年から2009年にかけて目立って減少している。学校教育以外の機関数はやや減少傾向にあるもののほとんど変化がない。

初等・中等教育機関数の増加については、最近の動向として、低学年(小学校1・2年生)から自分の子供に外国語を学ばせたいという親の外国語教育に対する意識が高くなっていることが背景にある。このようなニーズに応じて、3.1で紹介したように日本式の高校制度を取り入れた「新モンゴル高校」、日本語によるイマージョン教育を取り入れた学校が設立されるなど、日本語教育を行う初等・中等教育機関数の増加が注目される。

それに対して、日本語教育を行う高等教育機関数が減少しているのは、2007年にモンゴル教育文化科学省が高等教育機関改善方針を打ち出したことが影響しているものと考えられる。モンゴルでは、1990年代から大学の数が急増し、それに伴って高等教育の質が低下したため、モンゴル教育文化科学省は、2007年、モンゴルの各大学の教育の質を上

げるために、前述の方針によって、大学の統廃合を行い、優秀な教師の再配置を目指した。この政策により、結果的に大学の数そのものが減少したためではないかと考えられる。

日本語教師については、初等・中等教育機関と学校教育以外の機関に比べて、高等教育機関の教師数の減少が大きいことが注目される。筆者の日本語教師としての経験からも現場においてまだまだ優秀な日本語教師数が不足しているものの、教師の数そのものが減少しつつあることを身近に感じている。様々な要因が考えられるが、大学における教員の待遇が改善されないことが大きな原因の一つではないかと思われる。

学習者については、1998年から2006年まで急増していた高等教育機関と初等・中等教育機関の学習者が2006年から2009年にかけてやや減少している。日本とモンゴルの幅広い交流がきっかけで1990年から2000年までは、日本語学習者が急激に増え、日本語がブームとなった時期である。このような急激な増加が、2006年から若干減少し、安定期に移り変わろうとしていると言えよう。一方、学校教育以外の機関の学習者数は、1998年以降徐々に増加しつつある。これには、日本語能力試験、実用日本語テスト(J.TEST)、日本留学試験などの受験勉強、日本での研修のための準備など、公的な学校教育機関以外の機関で日本語を学びたいというニーズが高まったことも影響しているのではないかと考える。

### 3.3 日本語教育分野における課題

モンゴルと日本語のあらゆる分野における交流のますますの発展に伴い、ドルゴル(2009)では、日本語教育分野における課題について、次のように述べている。

- ① 日本語教員の必要性、日本語教員の高度な能力が求められるようになったことに従い、高等教育機関における日本語教員の質を高める必要がある。

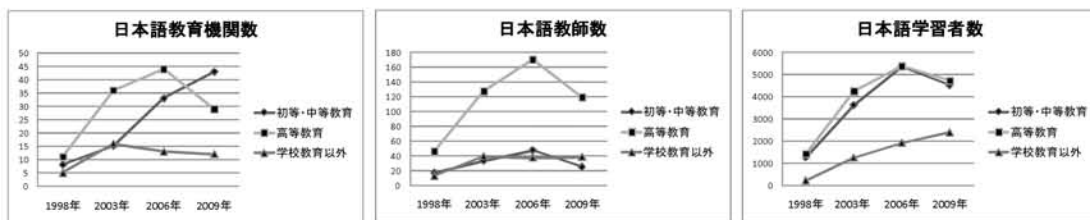


図2 日本語教育機関別調査

- ② モンゴルの外国語教育政策における日本語教育の位置づけを明確にすること。
- ③ 初等・中等教育機関と高等教育機関における日本語教育の一貫性、各段階に適応した日本語教育スタンダードの作成、コースデザインを充実させること。また、大学入学試験の外国語試験に日本語を取り入れられる可能性を探ること。
- ④ 日本語を専攻して、または選択科目として学習しているモンゴル人日本語学習者向けの教科書、教材を開発すること。

日本語教育の分野全体としてこのような問題がある中、本稿では特に学習者数は減少したとはいえ、日本語学習者数が全体の 40.61%と、3 種の教育機関の中では最も多くを占め、初級から上級までの一貫した日本語教育が行われている高等教育機関における日本語教育、さらに漢字教育の現状と問題点に着目し、報告する。

## 4. 高等教育機関における日本語教育

### 4.1 日本語教育の現状

高等教育機関においては主に日本研究者、日本語教師、日本語または技術日本語の翻訳、通訳のできる人材の育成を目的に初級から上級までの日本語教育が行われている。

最近では、理科系の学生が初級レベルの日本語を選択して学習するという動向がある(例：国立科学技術大学の電気通信学部、工学部の学生)。

高等教育機関で日本語を学ぶ学生の多くは日本への留学や日本関連企業への就職を希望し、日本語を専攻している。毎年試験に合格して選ばれた学生が文部科学省の日本語・日本文化研修留学生として渡日するほか、近年は私費留学をする学生も多い。独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)による平成 16 年度から平成 22 年度外国人留学生在籍状況調査結果を見るとモンゴルからの留学生数は平成 16 年、806 名であり、それ以降徐々に留学生数が増加し、平成 22 年には 1282 名となっている。

大学卒業後は、公的機関、教育機関及びモンゴルの日系企業等に就職したり、大学院に進学したりする者が多い。

### 4.2 高等教育機関における日本語教育の問題点

#### 4.2.1 教育上の問題点

モンゴルの高等教育機関における日本語教育の

問題点として次の 3 点が指摘されている(ムンフツェツェグ 1995、スレン 2009)。

- ① 近年、中等教育機関においても日本語教育が実施されているが、高等教育機関における日本語教育との一貫性がない。
- ② 大学院在学中、または、大学院を修了してまもなく日本語教師になる人が多いが、教授法の研修など教師教育を受けていない場合が多く、日本語教師としての養成を同時に行う必要がある。
- ③ モンゴル人日本語学習者向けの中級、上級の日本語の教材がない。

また、これらの問題以外にも、モンゴルにおける漢字教育の問題を指摘することができる。実際にモンゴル人教師にとっては漢字・漢字語彙をどのように指導すればいいかということは大きな課題となっている。この問題は、学習上の問題でもあるため、次節でさらに言及する。

#### 4.2.2 学習上の問題点

モンゴル人日本語学習者は、日本語学習上でどのような問題を抱えているのか。ダンザンニヤム・馬場(2009)は、モンゴルの 4 大学の 277 名を対象に質問紙調査を行った。質問項目の中の「日本語の何が一番難しいですか」という質問に対して、49%が漢字が難しいと答えており、モンゴルの学習者にとって漢字学習が大変難しいこと、漢字の有効な学習方法が求められることが指摘されている。

また、ウラムバヤル(2005)では、実際に学習者が感じている漢字学習に関する問題点について、モンゴルの大学の 1 年生から 4 年生の 119 名を対象に自由記述をさせた。その結果、モンゴルの学習者は、漢字学習の問題点として、漢字の読みが多くて難しい、画数が多くて難しい、漢字の書き順が難しい、形が似ている漢字が難しい、漢字を使わないと忘れる、漢字が覚えられない等を問題と感じていることが明らかになった。

モンゴルの日本語学習者にとって日本語の文法の習得はそれほど困難ではない。これは、筆者自身の日本語学習者としての経験からも言えることである。角田(1991)、温品(1998)でも、モンゴル語の文法構造は日本語によく似ており、特に語順はほとんど同じで、単語の活用の仕方も原則的に共通していると指摘されている。

一方、言語表記の面では、表音文字であるキリ

表2 モンゴルの3つの大学(4学部・学科)における漢字教育

機関	漢字指導期間	使用教材	漢字指導手順
A 機関	1年目に32週間 2年目に32週間 (週に2コマ、1 コマは90分間)	『Basic Kanji BOOK 基本漢字 500 Vol.1』(加納ほか1990) 『Basic Kanji BOOK 基本漢字 500 Vol.2 第5版』(加納ほか2004) 『INTERMEDIATE KANJI BOOK 漢 字 1000plus Vol.1 改定第2版』(加納 ほか1993) 『INTERMEDIATE KANJI BOOK 漢 字 1000plus Vol.2 改定第3版』(加納 ほか2008)	まず、漢字の復習テストを行 う。次に教師が黒板を使いなが ら新出漢字の書き順、読み、意 味について説明する。また、よ く使われる熟語を板書し、意味 を説明する。新出漢字の説明の 後、学習者が個人で教科書の練 習問題をやる。
B 機関	1年目に32週間 (週に2コマ、1 コマは90分間)	市販教材を参考に自作した教材	教師が新出漢字1字1字につい て黒板を使いながら書き順、意 味、読みを説明した後、一緒に 使われる熟語の例を提示し、文 の中でどのように使われるか例 文を提示して説明する。
C 機関	1年目に32週間 2年目に32週間 (週に2コマ、1 コマは90分間)	『Basic Kanji BOOK 基本漢字 500 Vol.1』(加納ほか1990) 『Basic Kanji BOOK 基本漢字 500 Vol.2 第5版』(加納ほか2004) 『INTERMEDIATE KANJI BOOK 漢 字 1000plus Vol.1 改定第2版』(加納 ほか1993) 『INTERMEDIATE KANJI BOOK 漢 字 1000plus Vol.2 改定第3版』(加納 ほか2008)	教師が板書を使いながら新出漢 字の書き順、意味、読みについ て説明する。よく使われる熟語 の例を提示し、漢字の様々な使 い方を理解してもらうために短 文を使って説明することが多い。
D 機関	1年目に30週間 (週に5コマ、1 コマ90分間)※	『日本語初歩』(国際交流基金 1985) の新出漢字	新出漢字の書き順について黒板 を使って説明し、同時に読みと 意味を説明する。教師によって 音訓読みを同時に教える場合も あれば、その課で使われる語彙 の読みだけを教えることもある。 新出漢字の指導後、教師が その漢字が入った例文を黒板に 書いたり、学習者に例文を作ら せたりする。

※D 機関では、漢字授業を設けておらず、1年において「日本語の文法表現」の授業で、文法、会話、漢字の指導を行っている。

ル文字に対して、日本語の漢字は、形態、読み、意味、用法という知識が必要とされるため、前述の通り、習得が難しいと感じられているのではないだろうか。そこで、次章では、漢字学習に関する問題を取り上げる。この問題は、学習者が実際にどのような指導を受け、どのような漢字能力をもっているのか、現状を総合的に把握した上で考える必要がある。次章では、筆者が行った実態調査の結果と、そこから見える問題点と今後の課題について述べる。

## 5. 高等教育機関における漢字教育

### 5.1 漢字教育の現状

モンゴルの漢字教育の現状を把握するために、筆者は、2009年にモンゴルの3つの大学(4学部・学科)：国立科学技術大学言語教育学部(A機関)、国立大学外国言語文化学部(B機関)、国立大学モンゴル言語文化学部(C機関)、人文大学アジア言語学科(D機関)のモンゴル人日本語教師4名にそれぞれの

大学で行われている漢字教育についてインタビューをした。インタビューでは、漢字指導期間、使用教材、漢字授業の簡単な流れについて聞き、筆者がメモを取った。それぞれの大学で行われている漢字教育について表 2(前頁)にまとめた。漢字指導期間については、A 機関では 1 年目と 2 年目、B 機関と C 機関では 1 年目、C 機関では特別に漢字の授業を設けてはいないが、1 年目に文法の指導と一緒に漢字の指導がされている。どの大学も最初の 1 年目には、漢字の指導が行われているが、2 年目以降(A 機関の場合 3 年目以降)の漢字学習は学習者自身に任されている。

漢字指導については、全ての機関で板書を用いながら単漢字の書き順、読み、意味に着目した説明を丁寧に行っている。これは、2.2 で紹介したキリル文字を使用するモンゴルの学習者にとって日本語の漢字は、書き順をはじめ、多読・多義性を持つなど様々な情報を覚えなければならないので、初期において漢字に関するこのような説明が重要になるためと考えられる。

熟語や文レベルでの漢字の指導は、全ての機関で行われていた。日本語の漢字に関してその形態、読み、意味の他に漢字が熟語として、また文の中でどのように使われるかという漢字の使用に関する知識は、非常に重要である(加納 2004)。インタビュー調査の結果、その指導は、教師の説明による知識の導入、あるいは学習した漢字の使用に重点を置いたものであることがわかった。

このような指導のもと、学習者はどのような漢字能力を持っているのか、その実態について次節で述べる。

## 5.2 学習者の漢字能力の実態

モンゴル人日本語学習者が漢字の「字形の複雑さ」「数の多さ」「多読性・多義性」などを難しく感じている(ウラムバヤル 2005)ことは明らかになっているが、これまで学習者がどのような漢字能力を

表 3 対象機関・対象者(学年別)

	1年	2年	3年	4年	総数
A 大学	41	22	17	22	102
B 大学	27	32	22	10	91
C 大学	28	17	20	10	75
D 大学	11	14	18	22	65
総数	107	85	77	64	333

持っているかを総合的に調べた研究はない。

そこで本節では、加納(2004)の漢字処理能力テストを用いて筆者が実施した、モンゴル人学習者の漢字処理能力テストの結果を報告し、モンゴル人学習者の漢字能力の実態について述べる。

### 5.2.1 対象機関・対象者

本実態調査は、2009 年 3 月に 5.1 で紹介した 3 大学(4 学部・学科)を対象に行った。調査対象者は、日本語を専攻とする 3 大学の 1 年生から 4 年生のモンゴル人日本語学習者 333 名である(表 3 参照)。対象者の 39 名は男性、294 名は女性で、全ての学習者の母語がモンゴル語である。また漢字が使われる言語の学習経験をもつ学生は対象からはずした。

### 5.2.2 漢字語彙処理能力の測定

前述の通り、学習者の漢字語彙処理能力を測定するために加納・酒井(2003)、加納(2001、2004)が開発した初級の漢字語彙処理能力テストを用いた。漢字語彙処理能力テストを 2009 年 3 月にモンゴルの 3 大学(4 学部・学科)の 1 年生から 4 年生のクラスで一斉に行った。

漢字語彙処理能力の測定テストは、表 4 に示したように A から N までの 14 の処理能力を測定する項目から構成されている。

それぞれ、14 項目には下位問題 10 問があり、合計 140 問からなる。各問には、4 つの選択回答がある。1 つの問に対する正答は 1 点で、合計 140 点である。テスト時間は、60 分である。

表 4 漢字語彙処理能力テストの項目

A)	漢字の字形識別問題	字形処理
B)	字形構造パターンの識別問題	字形処理
C)	字形・語系と漢語による意味の連合問題	意味処理
D)	対義字・対義語の識別問題	意味処理
E)	字形・語形と読みの連合問題	読み処理
F)	同音字の識別問題	読み処理
G)	読みと字形・語形の連合問題	書き処理
H)	構成要素の識別問題	書き処理
I)	漢字の音声による処理問題	音声処理
J)	音声による漢語の意味処理問題	音声処理
K)	漢字の送り仮名の用法問題	用法処理
L)	漢字語の品詞の識別問題	用法処理
M)	文脈(文法的共起性)による漢語の選択問題	文脈処理
N)	文脈(意味的な連語知識)による漢字語選択問題	文脈処理

表 5 初級の漢字語彙処理能力テストの結果

対象者 (3大学)	字形処理		意味処理		読み処理		書き処理		音声処理		用法処理		文脈処理		合計140点
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	
1年 (107名)	8.06	5.46	7.58	6.22	7.96	3.79	6.94	6.88	7.21	3.30	4.73	4.33	3.05	3.13	78.63
2年 (85名)	8.06	6.13	8.64	7.58	8.66	5.84	8.99	8.53	8.84	5.35	7.14	7.14	5.02	5.88	101.79
3年 (77名)	8.18	8.18	9.16	8.30	8.88	6.48	9.21	8.88	8.94	6.55	7.47	7.60	5.82	6.34	109.97
4年 (64名)	8.45	7.38	8.86	8.30	9.33	7.02	9.45	9.11	9.22	7.30	7.69	7.83	6.09	6.58	112.59
総数 (333名)	8.16	6.63	8.46	7.45	8.62	5.55	8.47	8.19	8.41	5.34	6.55	6.47	4.78	5.24	98.32

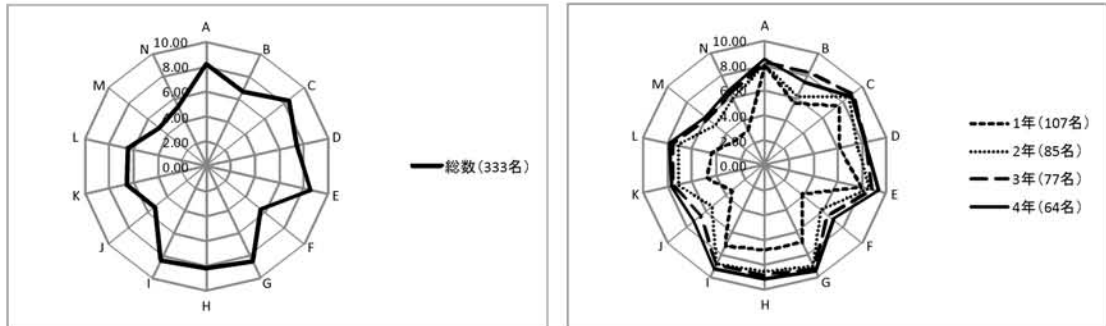


図 3 初級の漢字語彙処理能力テストの結果(左：全体、右：学年別)

### 5.2.3 調査結果

表 5 は、全ての調査機関の日本語学習者の初級の漢字処理能力テストの質問項目ごとの平均値を示したものである。漢字語彙処理能力テストの各項目の平均値を見ると、「漢字の字形識別(A)、意味処理(C、D)、字形・語系と読みの連合(E)、書き処理(G、H)、漢字の音声による処理(I)、用法処理(K、L)の問題の平均値が 1 年時から 6 ポイント以上で、比較的高い傾向にある。これは、モンゴルの大学において漢字の形と書き順、部首等構成要素、意味、読みに関する指導が丁寧に行われていることと表れたと言えよう。

一方、各問題の中で平均値が低い問題には、同音字の識別(F)、音声による漢語の意味処理(J)、文脈(文法的共起性)による漢語の選択(M)、文脈(意味的な連語知識)による漢字語の選択(N)の問題が挙げられる。これらの問題はいずれも学年が上がるにつれて着実にポイントが上がる傾向を示しているが、他の項目に比べて依然低いという関係性は変わらない。

また、学年による変化を見ると、3 年と 4 年ではどの問題も得点あまり伸びず、字形構造パターンの識別(B)、字形・語系と漢語による意味の連合(C)問題のように若干逆転する項目もあり、3 年生で漢字能力の伸びがとまっている可能性がある。以下、上述した平均値の低い 4 つの問題について検討する。

### 5.2.4 問題点の考察と今後の課題

まず、同音字の識別問題(F)は、単漢字の音読みを想起できるか、という技能をみる問題である。たとえば、「行」という漢字の音読みと同じ音読みを持つ漢字を選ぶ問題(例：行 a.高 b.号 c.今 d.午)である。加納(2004)では、単漢字 1 字の語は訓読みされることが多いが、漢字熟語になると音読みされることが多い。日本語のレベルが上がるにしたがって漢字熟語を多く習得しなければならず、音読みの想起ができるかどうかは重要なポイントになると述べている。前述した漢字指導に関するインタビューでは、全ての機関で、漢字の読みの指導を行っていた。訓読みと音読みを同時に与えている場合も多い。しかしそうした知識を与えるだけでは「漢字の音読みの想起」には結び付きにくいということであろう。今後検討すべき課題である。

次の音声による漢語の意味処理問題(J)は、テープで音声による意味の説明を聞き、相当する漢字の言葉を選択する問題である(例：テープによる音声「のどが かわいた時に 飲みます。」 a.肉 b.魚 c.茶 d.馬)。音声を聞きながら、その意味を理解し、相当する言葉の漢字表記を思い浮かべるといった処理技能が要求される問題である。この問題は、学習者の聴解力に影響される可能性があるため、漢字能力の問題だけとは言い難い。この点は加納(2004)でも、

複数の処理を同時にすることが要求される問題であると述べており、学習者にとって非常に難しかったと考えられる。

最後の文脈(文法的共起性)による漢語の選択(M)、文脈(意味的な連語知識)による漢字語の選択(N)の問題は、漢字の形・音・意味・用法の総合的处理技能を見る問題である。文脈(文法的共起性)による漢語の選択問題(M)は、文中の漢字語彙以外の情報、助詞情報、共起単語情報等を使って、適切な漢字語を選択する問題である(例：ここで パスを [ ] ください。 a.乗せて b.乗って c.降りて d.降って)。文脈(意味的な連語知識)による漢字語の選択問題(N)は、「テレビ」と「みる」、「ふく」と「着る」のように、文中でよく共起する漢語を類推し、選択する問題である(例：あぶない から くるまに [ ] して ください。 a.注文 b.意見 c.注目 d.注意)。モンゴルの学習者は、該当漢字語に関する文脈、つまり助詞や共起単語の情報、意味的な連語知識などを使って漢語を推測するという技能が低いという傾向があることがわかる。この、文脈を利用して推測するという問題は、ストラテジー教育と関係するのではないかと考える。

前述の漢字指導のインタビューでは、熟語の説明や、学習漢字を使って作文させる指導を行っているが、学習者自身が、文脈の中で、既存の知識を使って漢字を推測するようなストラテジー教育を行っているという機関はなかった。今後は漢字指導の中で、知識を与えたり、産出させるだけでなく、文脈の中でさまざまな情報を利用して漢字語を推測するストラテジー教育にも力を入れる必要がある。

また、こうした指導は、漢字の授業だけではなく、読解や聴解の授業との関連もあると考えられる。したがって、漢字学習のストラテジー指導は漢字の授業だけではなく、読解などの授業とも連携して指導することが重要だろう。

## 6. まとめ

本稿では、まず、モンゴル人日本語学習者の背景となるモンゴルの基本情報、モンゴルの言語、教育制度について紹介した。次にモンゴルにおける日本語教育について概観し、日本語機関数、教師数、学習者数が1998年から2006年まで急増していたが、2009年から増加が伸び悩んでいることを指摘した。また、モンゴルの高等教育機関中心型の日本語教育

は、初等・中等教育機関への日本語教育の広がりを見せている。さらに日本語教育が盛んに行われている高等教育機関における日本語教育、特に漢字教育について、漢字教育の現状、実際にモンゴル人日本語学習者が持っている漢字語彙処理能力の実態を調査した。その結果、モンゴル人日本語学習者が漢字の同音字の識別、文脈(文法的共起性や意味的な連語知識)による漢字語の選択の能力が低いことが分かった。

従来のモンゴルの高等教育機関における漢字教育は、モンゴル人学習者に漢字の形態、多読・多義性にとまらぬ難しさを克服できるよう知識を与え、産出活動を行うことを重視してきた。そうした指導は字形識別、意味処理、書き処理などにある程度の効果をあげているが、今後は、文脈の中で既存の知識を利用して漢字を推測するような漢字語彙処理ストラテジーに着目した指導も重要であると思われる。

本稿で報告したモンゴル人日本語学習者の漢字語彙処理能力の問題点は、非漢字圏日本語学習者全般に共通する傾向だと考えられる。したがって、非漢字圏日本語学習者を指導する教師間で、問題を共有し情報交換をしながら解決策をともに考えることが重要である。そのような連携が非漢字圏日本語学習者に対する効果的な漢字指導の実現に繋がるのではないだろうか。

## 謝辞

まず、筑波大学人文社会科学研究科文芸・言語専攻留学生センター加納千恵子先生に「漢字語彙処理能力テスト」を使用することを許可して頂き、心よりお礼を申し上げます。

今回の教育事情調査をモンゴルの3つの大学(4学科・学部)で行いました。調査に当たってモンゴル人日本語教師会ドルゴル会長、モンゴル国立大学外国言語文化学部日本語学科ボルドバートル学科長、同大学モンゴル言語文化学部外国語学科バルジンニヤム学科長、人文大学アジア言語学科ジャンパルスレン学科長、モンゴル国立科学技術大学言語教育学部ボルド学部長には、調査することを許可して頂きました。ここに深く感謝致します。

また、調査実施に当たってはモンゴル国立大学のマイスルド先生、オノン先生、人文大学のバットサイハン先生、オユンビレグ先生、科学技術大学の同僚の皆さんにご協力を頂きました。心より感謝の意を表します。

また、調査に協力くださった学生の皆さんにも感謝致します。

## 参考文献



- ウラムバヤル ツェツェグドラマ(2005)「モンゴル国立科学技術大学の学生が使用している漢字学習ストラテジー—漢字シラバスの作成に向けて—」『日本語文化研究会論集』創刊、国際交流基金日本語国際センター・国立国語研究所・政策研究大学院大学, 201-228.
- 加納千恵子(2001)「外国人学習者による漢字の情報処理過程について—漢字処理技能の測定・評価に向けて—」『文藝言語研究言語篇』39, 筑波大学文芸言語学系, 45-60.
- 加納千恵子・酒井たかこ(2003)「漢字処理能力測定テストの開発」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』18, 59-80.
- 加納千恵子(2004)「漢字語彙力の評価と漢字教育の方法—教育現場での実践研究のあり方を探る—」『日本語教育論集』20, 国立国語研究所, 1-17.
- 後藤田遊子(2002)『世界の言語政策—多言語社会と日本—』くろしお出版
- 国際交流基金(2000)『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・1998年—』大蔵省印刷局
- 国際交流基金(2005)『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2003年—』凡人社
- 国際交流基金(2008)『海外の日本語教育の現状—日本語教育機関調査・2006年—』凡人社
- ドルゴル(2009)「モンゴルの日本語教育の現状」『論文集』314, モンゴル国立大学外国言語文化学部, 188-190.
- Сүрэнгийн Долгор “Монголын япон хэлний сургалтын өнөөгийн байдал” Эрдэм шинжилгээний бичиг 314, Монгол улсын их сургууль, Галаад хэл, соёлын сургууль УБ., 2009)
- 角田太作(1991)『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 温品廉三(1998)「モンゴル語」『世界の言語ガイドブック 2(アジア・アフリカ地域)』三省堂, 358-373.
- ダンザンミヤム プレンチメグ・馬場久志(2009)「モンゴルにおける日本語学習者の現状と課題」『埼玉大学紀要教育学部』58, 145-157.
- ムンフツェツェグ(1995)「モンゴルにおける日本語教育、現状と問題点」『日本語教育事情報告編 世界の日本語教育』3, 15-20.
- 外務省「各国・地域情勢アジアモンゴル国」  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mongolia/> 2010年11月11日アクセス
- 国際交流基金「日本語教育国別情報モンゴル」  
<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/> 2010年11月11日アクセス
- 国際交流基金「2009年海外日本語教育機関調査速報値」  
<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/> 2010年11月1日アクセス
- 独立行政法人日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査結果」  
<http://www.jasso.go.jp/statistics/> 2010年12月31日アクセス
- モンゴル教育文化科学省「2011年モンゴル総人口調査結果」  
<http://www.mecs.gov.mn/frontpage/> 2010年12月31日アクセス

うらむばやる ちえちえぐどらむ／国際交流基金日本語国際センター、政策研究大学院大学  
日本語文化研究プログラム博士課程  
tsetsegdulamu@yahoo.co.jp

## Japanese-language higher education in Mongolia

— The realities and problems of Kanji education —

ULAMBAYAR Tsetsegdulam

### Abstract

About 41% of students in the higher education system in Mongolia are studying Japanese language. This paper attempts to study the Kanji learning ability of these learners. The data for this research has been collected from interviews of Mongolian Japanese language teachers and surveys of learners by applying the ‘Kanji vocabulary processing’ test developed by Kano (2004). From the interview, it has been found that, the shape, meaning and readings of Kanji are suitably introduced in the Kanji classes. Nevertheless, from the survey it has been found that Mongolian learners of Japanese lack the ability to fully use the information thus acquired, related to grammar and the meaning of Kanji, to accurately select the appropriate Kanji. Going forward, it is important to implement a tuition strategy whereby students emphasize the context, and utilize their existing knowledge to deduce the meaning of Kanji.

**【Keywords】** Higher educational institutions of Mongolia, Kanji education in Mongolia, Japanese language learners of Mongolia, Kanji related vocabulary processing ability

(The Japan Foundation Japanese-Language Institute, National Graduate Institute for Policy Studies)